

# 都市の隙間空間としての「裏道」 —港区元麻布の「裏道」を生きる人々の活動実践への注目から—

横山 順一

## “Back Street” as a Spatial Niche in the City —A Case Study in the Motoazabu Area of Tokyo—

**要旨：**2000年代に入り大都市、特に東京都心の空間は、大資本や行政が牽引する力によってその姿を大きく変えてきている。そこでは超高層マンションや大型複合施設によって形成される開発空間が誕生しているが、同時にその袂に隙間的、裏道的と呼べるような空間もまた生成、もしくは発見されてきている現実がある。本論はこのような東京都心部の空間再編成過程においてたち現れてきている隙間空間としての「裏道」に注目し、その形成過程の把握とそれが今日の都市空間に対して有する意味の検討を目的とする。またその際、生活や経済活動の舞台として「裏道」を選んだ人々にとってそこがどのように生きられているのかという点に特に注目する。

本論の構成は以下の通りである。はじめに問題の所在を述べ、次に方法論の検討として、都市サブカルチャー研究と消費社会論的都市研究、場所論、社会学的意味論という3つの領域の諸研究を検討する。第3に本論が対象とする港区元麻布エリアにある「裏道」を地理的特徴と物質的特徴から捉え、第4に、2000年代に入り「裏道」に付与された意味の検討を通し、そこを生活や経済活動の舞台として選んだ人々の活動実践を捉えていく。そして最後に、ニッチ産業を生きる人々による濃密なコミュニケーションへの注目から「裏道」の今日的な意義を論じる。

**キーワード：**隙間空間、裏道、場所

### 1. 問題の所在 ——隙間空間としての「裏道」の可能性

本論の目的は、近年の都市空間、特に東京都心部の空間変容過程のなかで「発見」されてきた都市の隙間空間に注目し、そこを舞台とした人々の活動実践と場所への意味付与の過程を捉えることである。さらにそこから今日の大都市部における社会的な場所としての「裏道」の意義を検討することにある。

都市空間、もしくはその変容というテーマにおいて大都市東京は、常にその対象となってきた。その中でも近年、特に2000年代を通して、我々の目にも明らかな形で展開してきた東京都心部の空間再編成を具体的な対象とした、都市の社会学的研究が多角的に積み重ねられている。それらの研究は、2000年代の東京都心の新景観を創りだしてきた超高層ビルや巨大複合商業施設などに注目し、空間再編の実態把握やその背後に作動している政府や経済界の論理と実践を読み解くことを試みている。ここでは、国や東京都、不動産資本などによる都市開発が、郊外、湾岸に続き「空」に新たなフロンティアを求める動きが捉えられ（平山 2006、2010；植田 2009）、またその帰結としての都区部における地理的不均等な発展と社会的格差の発生が日本都市の「ネオリベラ化」というタームから把握されている（上野 2008、2010）。

こうした諸研究は、近年の都市空間の構造的な変容の特徴とその背景にある政治経済的力学の動きを捉え、それを批判的に検討していくという点において、今後ますます

重要となる研究分野である。しかし近年の都心空間の変容過程の特徴のもう一つの側面として、上記のような国家や一部の不動産資本が主導する大型再開発が生み出してきた超高層ビルや大型商業施設の袂に、隙間的・裏道的空間が生成している、もしくは発見されているという事実がある。この点を考慮に入れるならば、上記のような大型再開発によって現れている「表」の空間へのアプローチだけではなく、「裏」としての隙間空間へのアプローチも、今日の大都市の都市空間を把握する際には、必要不可欠な課題となる。そしてその際、上記諸研究のような空間の構造的な特徴へのアプローチと並行して、空間がどのように生きられているのかという、空間を生きる主体やその意味付けに注目したアプローチが欠かせない<sup>1)</sup>。

本論ではこうした問題関心から、東京都港区の元麻布地区にある「裏道」に注目し、その「裏道」がどのように形成されてきたのか、そして実際の使用者たちがどのようにしてその場所を選び、利用しているのか、そしてその場所にどのような意味が付与されているのか、について検討していく。2003年に竣工し既に当該地域において意味的な中心性を担うに至っている六本木ヒルズや、地域性を継承しつつ活気を見せる麻布十番商店街、丘陵地に広がる都心でも有数の高級住宅街、それらの「隙間」をぬって形成されている「裏道」の内実注目する。

## 2. 「個人」、「場所」、「意味」の交点に現れる「裏道」

### 2.1 都市サブカルチャー研究と消費社会論的都市研究からの示唆

先に見た90年代から2000年代を通して展開してきた東京都心部の空間再編性プロジェクトへの注目と並行して、隙間空間にアプローチする研究も、特にサブカルチャー集団と特定の空間やストリートの関係に焦点を合わせる形で展開してきている。

例えば、石渡雄介は、レコード店集積地として知られる渋谷宇田川町におけるクラブカルチャー実践者たちの活動実践とネットワーク形成過程を参与観察的調査によって丹念に描くことから、居住を媒介としないアクター達による空間への意味付与が、渋谷の重層的な意味空間の一つの層を形成していることを指摘する(石渡 2006)。

また、田中研之輔は、新宿駅付近のスケートボーダー達の活動実践に注目し、都市における監視・セキュリティ空間の迫り出しと、サブカルチャー実践者の「たまり場」形成の関係を論じている。そこでは秋葉原や池袋、中野などの駅前広場が監視化の色合いを強めることによって、スケートボーダー達はそこから去ると同時に、鋭い嗅覚をもって、新宿の路地裏に新たな自分たちのたまり場を見出す。そして、そこをスケートボードという身体的なパフォーマンスと仲間達と「たまる」という集合行動を通して自分たちの場所にしていったことが明らかにされている。そして表通りから隠された路地裏という物理的環境の特徴によって、彼らのたまり場が守られていることが指摘されている(田中 2004)。

さらに三田知実は、「裏原宿」として知られる渋谷・青山・原宿の路地裏空間を対象として、ストリート・カルチャーの担い手たちが、路地裏に集い、そこを自分たちの活動拠点としていくことにより、独自の街並みや意味空間が形成され、さらにそれが意図せざる形の地域活性化に繋がっていることを論じる。またそのなかで三田は、下位文化実践者が当該地域に集まる要因を①バブル崩壊による地価・家賃の下落、②地域の世代交代による空き家の増加、③下位文化に寛容であり、自らも実践者として関わる地元「土地持ち」の次世代層の存在、④渋谷・青山・原宿という消費文化の集積地としての地域特性という4点にあると指摘している。加えて、そうした小規模資本の下位文化集団の集中による地域発展は、大規模資本をもつ企業や行政権力による開発を招く可能性

があることを示唆している(三田 2006)。

また中村由佳は、上記と同様の「裏原宿」を対象に理論的検討を行っている。中村は、吉見俊哉の上演論的アプローチの再検討を通し、「裏原宿」が、80年代の渋谷パルコに象徴されるような、大資本が創作する非日常空間としての消費空間とは異なり、独立系の小規模資本のアクターによる日常性に立脚した消費空間が形成されていることを指摘する(中村 2006)。さらに中村は、「裏原宿」の消費空間としての成功に目をつけた大資本によって、「裏原宿」の消費空間としての特性のみがコピーされ、それが「裏原宿」という固有の場所から切り離され、表通りや郊外の駅前空間などに拡散してきている状況を「消費空間のストリート化」として論じる(中村 2007)<sup>2)</sup>。

以上の先行する諸研究は、都市の隙間空間としての「裏道」が生成、もしくは発見され注目を浴びるようになる背景には、行政による都市空間の監視化の進展、地価変動、大資本牽引型の消費空間の一定の行き詰まりなど、いくつかの政治経済的な構造的要因の存在があることを示唆している。またさらに、隙間空間としての「裏道」の出現を、消費空間の新たな形態、新たなモードとして読み取ることが可能であることを示している。より端的には、上述の諸研究は以下の特徴にまとめられる。

- ①特定のサブカルチャー集団に焦点化する傾向がある。
- ②隙間空間としての「裏道」が発生する要因を政治経済的要因、もしくは立地的特徴から把握している。
- ③「裏道」の発生とその隆盛を地域発展もしくは、新たな消費空間の誕生という枠組みで捉えている。

上記の研究成果に立脚しつつも、本論の問題意識は次の3点により焦点化する。①特定のサブカルチャー集団に拘泥せず、「裏道」を社会的な場所として捉え、そこに参与する複数のアクターに注目すること。②「裏道」が生成、もしくは発見される政治経済的、もしくは立地的条件をおさえつつも、生活や経済的活動の場所として「裏道」を選択したアクター側の意味付けにも注意を払うこと。③「裏道」の出現や発見を、地域発展や消費社会の新局面として理解するのではない、別の形の読みの可能性に「裏道」を開いていくことを試みる。

### 2.2 場所論からの示唆

次に、本論における筆者の「裏道」へのアプローチの際に重要となる、「場所」と「意味」という2つの概念について簡単に触れておく。

まず「場所」に関してだが、今日の場所研究は一つの

研究分野を成しているわけでは必ずしもないが、近年日本の社会学においてもその関心は高まりをみせている<sup>3)</sup>。場所という問題関心は、もともと哲学や地理学、建築学などで固有に展開されてきたが、今日の領域横断的な関心は、グローバル都市空間の議論を一つの出自としている。その中心的論者の一人である D. ハーヴェイは、空間と場所の関係について、前者が抽象化していくグローバル社会において、後者はアイデンティティと結びつくことにより、無意味になるどころかますますその重要性を高めていると主張した (Harvey1993=1997)。こうした彼の問題提起を批判的に検討する形で今日の場合研究は展開している。特に、カルチュラル・スタディーズやジェンダー・スタディーズを経由した地理学者や文化人類学者たちによって、資本主義の原理からだけでは説明できないグローバル空間と場所との関係が問われている。その代表的論者の一人である、D. マッシーは、ハーヴェイの「時間—空間の圧縮」概念の社会的な差異化の必要性を訴えている。つまり資本の論理だけではなく、例えばジェンダーやエスニシティなどの影響を考慮に加えるべきだと論じる。そのために彼女は「進歩的な場所感覚」という概念を用いて、具体的な場所における様々なネットワーク、社会的相互作用の重なりへの注目と、そこからの空間的発想の重要性を主張する (Massey1993=1997)。

こうした場所研究の潮流を背景に意識しつつも、本論では現実を読み解いていく作業のためのより基本的な場所概念を簡単に抑えておくに留める。そのためにはアメリカの社会学者の T.F. ギエリンの整理が役に立つ。ギエリンは場所の社会学的研究を構想するために、それまで地理学や建築学、歴史学などで独自に展開されてきた諸テーマを、社会学的に読み替えまとめる作業を行っている。そこで彼は、膨大な先行研究をテーマごとに手際よく振り分けていく際に、場所概念に関する基本原則を立てている。それは場所が①地理的立地 (Geographic Location) ②物質的形態 (Material Form) ③意味と価値の付与 (Investment with Meaning and Value) という3要素から構成されており、それらの要素は不可分な関係にあるというものである (Gieryn2000: 464-5)。本論でも便宜的に、このギエリンの場所概念に従い、上記3要素から対象となる港区元麻布の「裏道」を検討していく。

## 2.3 社会学的意味論からの示唆

Gieryn が提示した場所の3要素の中でも、本論が特に注目すべきは、「③意味と価値の付与 (Investment with Meaning and Value)」という要素である。意味や価値の付与に注目することによって、場所を単なる人や物を配置する安定的な基盤として捉えるのではなく、人々の諸実践の過程において立ち現れる社会的な場として捉えることができるからである。人々は活動実践やネットワーク形成を通してその舞台となる特定の場所にどのような意味を付与していくのか、また同時にその場所に付与された意味によって人々の活動はどのように規定されるのか、立地、物質的形態に加えてこうした視点を問うていく必要がある。場所研究における「Place-Making (場所形成)」(Gieryn2000: 468) という概念はまさにそうした問題意識を内包している。また Gieryn は、「Place-Making (場所形成)」に関するこれまでの社会学議論を、「権力と富による場所創造を駆動させる逆流的な力、場所専門家の職業的諸実践、場所を経験する (そして彼らの理解に基づき行動する) 一般の人々による感知と特質」(Gieryn2000: 468) という3つの研究潮流に分類できると述べている。Gieryn のこの分類にひきつけるなら、本論は第三の立場である、その場所を生きる人々の活動実践と場所経験に特に焦点化して議論を進めていくことになるだろう。

こうした意味への注目は決して新しい視点ではなく、日本における都市の社会学的研究においても既に提起されてきた。かつて吉見俊哉は、盛り場そのものに内在している都市性を見出すために、「意味の中心としての都市」概念を提起した。吉見はそれまでの支配的な都市概念—〈凝集点としての都市〉、〈結節点としての都市〉、〈非農業性としての都市〉、〈半自然としての都市〉—がいずれも盛り場の特徴を部分的にしか説明することができないと指摘した。それに代わり彼が提起した「意味の中心」概念では、意味は都市の特定の場所と人々を結びつける媒介的役割を果たしていると考えられる。人々は意味に導かれるように都市の特定の場に参入していき、意味の規定 (台本) に沿いドラマを演じるように振る舞うことで都市を経験していく。そして吉見によれば、それが最も顕著に現れる場所が盛り場であった (吉見 1987)。この視点から吉見は、1920年代の浅草から銀座、1970年代の新宿から渋谷という、東京における盛り場—意味の中心—の変遷において、人々の意識や振舞いの変化を明らかにしていくことから場所の意味変容を明らかにしつつ、そこから国民国家や消費社会の誕生

という社会像を活写していった(吉見[1987]2008)。

先に見た中村が論じていたように、「意味の中心としての都市」概念は今日でも示唆に富む(中村2006)。ただ本論の視点は、次の点において「意味の中心としての都市」概念とは異なる。一つは上記議論が意味への注目から、例えば国民国家や消費社会の誕生というより抽象的な現代社会像を抽出していったのに対し、本論は「意味」への注目から、「裏道」の場所性、そこにおける諸個人の活動実践を具体的な水準で捉えていくことを目指す。もう一つは、本論が「中心」ではなく「隙間」に注目する点である。北田暁大が論じるように、今日的な東京の現実に対し、意味の中心性や中心／周辺というアナロジーはリアリティを持てなくなっている状況がある(北田2002)<sup>4)</sup>。確かに2000年代の東京においてその中心点を見出すことは難しいかもしれない。しかしそのことが直ぐに空間の均質性と結びつくことはない。そこには多様なグラデーション、ムラ、または裂け目や境界領域が生じているはずだ。「隙間」という概念は、こうした中心点を見出すことが困難な空間にアプローチしていく際の一つの方法として有効だと考えられる。

### 3. 「裏道」の外と内 ——地理的立地と物質的特徴に注目して

本章では、東京都港区元麻布のある「裏道」を対象として上述の問題感心にアプローチしていく。当該地域は六本木ヒルズや麻布十番商店街という近年そのまちなぎを開発の影響から大きく変えてきている地区に隣接していると同時に、そうした開発によって隙間空間としての「裏道」の存在が可視化している地区であり、本論の問題意識に適った調査対象である。以降では、先のギエリンの議論にならい、まず当該地域の地理的立地の特徴を検討し、次にストリート・レベルから「裏道」の特徴を記述し、次章にて「裏道」に付与されるいくつかの意味を検討しつつ、そこを舞台とした人々の活動実践を捉える。

#### 3.1 「裏道」の立地的特徴——情報産業集積が開くフロン空間と土地の履歴の混在

本事例の対象地周辺図を見てみると(図1参照)、北側の丘の上には2003年に竣工した六本木ヒルズがある六本木六丁目、第二六本木ヒルズの建設も予定される東洋英和女学院や国際文化会館などがある六本木五丁目が広がる。環状3号線の南側の低地には麻布十番商店街が位置している。同商店街は、2000年の南北線・大江戸線の

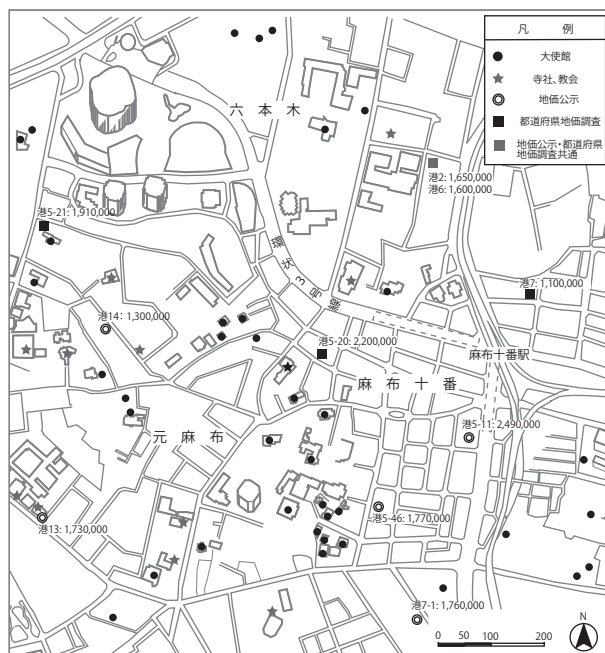


図1 調査対象地周辺図

出典：東京デジタルマップ株式会社、2005、『東京都デジタルマップ』、「Google マップ」(2010年9月17日取得、<http://maps.google.co.jp>)、国土交通省(2010)を参考に筆者作成。

同時開通、さらには六本木ヒルズ完成以降、飲食店や美容系店舗が増えてきてはいるものの、今も昔ながらの雰囲気を残しつつも国際色豊かで活気がある商店街として一般的に知られている。そして図の西側及び南西部に広がる丘陵地は高級住宅街が形成されている。

ここで、六本木五・六丁目、麻布十番、元麻布という3つのエリアが交差する当該エリアを、①産業集積、②地価、不動産の視点からその立地的特徴を確認しておく。まず産業集積という点において、当該地域を含めた港区は、情報産業や多様なサービス産業の集積が見られることが知られている。地理学者の小野純一郎は、80年代以降の東京の産業構造の変化を「サービス化・ソフト化の進展」、「事業所の小規模化の進行」にあると指摘し、赤坂・青山・六本木・麻布・渋谷を中心としたエリアには、知的創造活動を職業とする人口・事業所の集積が形成されていると論じ、これを「クリエイティブ・ゾーン(情報集積型産業地域)」(小野1989:95)と呼んだ<sup>5)</sup>。

また「平成18年事業所・企業統計調査報告事業所編」にて港区の従業者数上位20業種をまとめてみると次のようになる(表1参照)。従業者数の多い産業としては、情報サービス系(ソフトウェア業、情報処理産業)、対事業所サービス系(労働者派遣業、他に分類されない専門サービス業、他に分類されないその他の事業サービス

業、広告代理業、建物サービス業)、③放送・通信系(映像情報製作・配給業、固定電気通信業)、飲食・娯楽系(旅館・ホテル、酒場・ビヤホール、バー・キャバレー・ナイトクラブ)などをあげることができる。またさらに事業所の新設率と廃業率を見てみると、港区の新設事業所割合は48.6%と、渋谷区44.1%、中央区43.2%を押さえて東京都区市別単位で最も高い率である。一方廃業率は43.0%と、千代田区45.8%、中央区45.3%、新宿区43.4%、渋谷区43.1%について5番目に高い率となっている。

以上の統計的数値からは、先の小野が指摘したように、情報サービス産業の進展と職業の高度な専門分化が生じていること、さらにそこに事業の隆盛の激しさ、流動性の高さを読み取ることができる。

次に同エリアを地価、または不動産という側面から確認しておく。前頁図1に、同エリアの地価公示と都道府

県地価調査の数値をプロットした。東麻布(港-7)や六本木ヒルズの南(港-14)などでは1㎡あたり100万円前半だが、それ以外の地点では100万円代後半が多く、また麻布十番商店街近辺など200万を超える地点もある。一方で元麻布や南麻布の高級住宅街の地価は比較的安定して高い水準を維持している。例えばある不動産情報雑誌には、過去数年の土地の取引価格、1世帯あたりの平均年収、高額納税者数などから算定した「地価別『最高の町』ランキング」のベスト10が掲載されており、そこでは南麻布が1位、元麻布が4位に入っている(鈴木章一編 2009:60-1)<sup>6)</sup>。

この点から当該地域の地価の高さ、また居住者の経済階層の高さが理解されるが、さらに確認しておくべき点がある。それは、当該地域の地価はグローバルにフローするマネーに晒されており、その影響から時には急激に乱高下する特徴を持っているという点である。例えば地価公示価格の港5-11(麻布十番商店街)の地点における、地価公示価格年度別変動率を確認してみると、その乱高下の激しさは一目で理解できる(図2参照)。当該地区の別地点においても、地価公示価格変動率の折れ線グラフは同様の傾向を見せている。2000年代半ばからそれまでの東京都心の不動産価格はミニバブルの様相を呈していたが、2008年のアメリカ発世界同時不況の発生によりそれは崩壊した。当該地域はこうした不安定なかたちで世界を包むフローの空間に晒されているのである。

さらに上記と合わせて確認しておきたい点は、当該地域の住宅ストックの多様性である。当該地域は丘の上の高級住宅街や投資の対象となるホットスポットの狭間に土地の履歴を継承する古い住宅ストックが残っている。筆者による地元不動産業者へのインタビューでは、「この町は日本で一番高い賃貸料が取れる町だと言っても過

表1 港区の従業者数上位20位

順位	産業(小分類)	従業者数(人)	割合(%)
1	ソフトウェア業	64,325	7.13%
2	労働者派遣業	32,160	3.57%
3	他に分類されない専門サービス業	31,225	3.46%
4	電気機械器具卸売業	27,772	3.08%
5	他に分類されないその他の事業サービス業	19,036	2.11%
6	映像情報制作・配給業	17,582	1.95%
7	化粧品・歯磨・その他の化粧用調整品製造業	14,959	1.66%
8	建物サービス業	14,880	1.65%
9	衣服・身の回り品卸売業	14,365	1.59%
10	広告代理業	14,310	1.59%
11	旅館・ホテル	12,410	1.38%
12	一般土木建築工事業	12,293	1.36%
13	酒場、ビヤホール	11,173	1.24%
14	情報処理サービス業	11,108	1.23%
15	銀行(中央銀行を除く)	10,990	1.22%
16	固定電気通信業	10,734	1.19%
17	一般機械器具卸売業	10,258	1.14%
18	食料・飲料卸売業	10,055	1.12%
19	バー、キャバレー、ナイトクラブ	9,776	1.08%
20	日本料理店	9,397	1.04%
(全産業)		901,544	100

出典：東京都(2010)、森記念財団編(2005)をもとに作成。

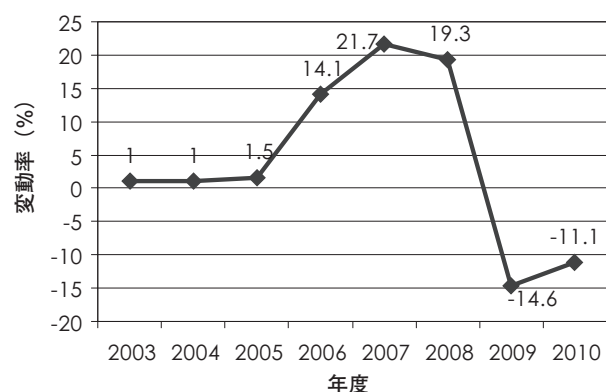


図2 港5-11の地価公示価格年度別変動率

出典：国土交通省(2010)



言ではない。しかしその一方で下は2万円からあります。摩訶不思議な町です。」(2010年9月2日実施)といった証言があるが、ここからも当該地域における住宅ストックの多様性が伺い知れる。そして、後に確認するが、こうした築年数は重ねているが、周辺の家賃相場と比べ比較的安価な値段で借りることができる物件に、近年新たなアクターが入居しているのである。

こうした比較的安価な物件の存在を裏支える装置のひとつに、寺院、神社、教会などの宗教施設の存在があるだろう。歴史的に寺社と結びつきが深い各国大使館もそこに加えてもいいだろう。一般的にも港区に宗教施設や大使館が多いことは知られているが、先に示した地図上だけでも、38ヶ所の宗教施設、10ヶ所の大使館が確認できる(図1参照)。こうした施設の存在は、文化人類学や宗教学においては、社会の周縁もしくは境界領域を示すものとして知られている<sup>7)</sup>。

以上のことから示唆されるのは、当該地域が、近年の開発や投資の対象となるホットスポットとしての性格を強くもっていると同時に、それだけではない開発や投資の力に払拭されない、地域の時間に根ざした土地も少なからず残しているということである。

### 3.2 「裏道」の物質的特徴——緊密で閉鎖的雰囲気的路地裏空間

本事例が対象とする「裏道」は、元麻布の谷地に位置し、北東の位置には麻布十番のメインストリートが通り、南の斜面を登れば元麻布の高級住宅街が広がる。本節ではこのような立地にある「裏道」を物質的特徴という視点から捉えていく。具体的には、ストリート・レベルの視点から、「裏道」の環境的側面を記述していく。またその際、筆者がフィールドワークから作成した図3を参照しつつ、便宜的に分けた〈商店街エリア〉、〈寺社地エリア〉、〈路地裏エリア〉の3エリア毎にその特徴を確認していく。ただ図上における建築物の構造の〈鉄コン系〉と〈木造〉という分類は、筆者の目視の確認のみにとどまっており、建築学や都市計画的な事実とは若干のズレがあることが予想される。

第一の〈商店街エリア〉は、麻布十番商店街のエリアに入っており、都市計画の用途地域では、近隣商業地域とされている。建物の高さも中高層のものが目立つが、マップ写真①周辺にあるように低層の木造建築物も存続している。建物の使われ方としては、住居、個人事務所に加えて、例えば写真②の雑居ビルのように、1階に飲食店が入り、2階以上は事務所や貸しオフィス、マッサ

ージ店などがテナントして入るという利用のされ方もある。

次に〈寺社地エリア〉は、都市計画の用途地域では、第1種住居地域とされており、ほぼ全ての建物が中低層の高さとなっている。また構造的には多くは鉄筋コンクリート系の建物だが、その間には木造建物の存在も確認できる。住宅の種類としては、写真⑦、⑫のような中層の賃貸マンションや写真⑥、⑧、⑨、⑩にあるような低層の木造住居や古くからある戸建住宅、写真⑪のような近年建設された戸建住宅の存在も確認されるなど、バラエティに富み、かつ建物の建築年数も多様であることが確認される。また通りの入り口南側には教会、通り北側には寺院や公的施設が大きな面積を占めていることも、このエリアの特徴である。

最後に〈路地裏エリア〉は、都市計画の用途地域では、第1種中高層住居専用地域と指定されており、高層建築物は存在しない。建物の構造物は特にエリアの南側に木造のものが多く、通り沿いには大手ディベロッパーの社宅やマンション、また外国人向けの高級賃貸マンションが近年建てられているが、このエリアはもともとA寺院の寺社地として知られている。A寺院南側の木造家屋が密集するエリアは、関東大震災後に丘の上の高級住宅街の居住者を得意先とする職人たちに開かれた土地として知られている<sup>8)</sup>。また写真⑭の高級賃貸住宅やその南側の駐車場がある土地も、バブル以前までは木造家屋が並んでいたという<sup>9)</sup>。

また全体的な共通点を探ると、まず「裏道」を貫く通りが一方通行ということから通りの幅が狭く、建替時にセットバックをしたいいくつかの寺社以外は、通りと建物の距離が非常に接近している。こうした通りと建物の距離の近さによる緊密性が、裏道的な空間の雰囲気を形成しているといってもよいだろう<sup>10)</sup>。さらに注目すべきは、「裏道」全体が路地裏的構造をなしている点である。というのも、歩行者レベルでは、商店街と隣接している写真②、③の地点が「裏道」の出入口となっており、通り抜けができないA寺院の南側のエリアが「裏道」の最奥地となっている。こうした構造的な路地裏的特徴により「裏道」は周辺の環境から分節され、特徴としての周囲から隠された閉鎖的な雰囲気を獲得していると言える。図上では写真⑫、⑬の地点で通りが4又に分岐しているが、写真⑬の抜け道以外は、いずれも上り坂になっており、視覚的な連続性を感じにくくなっている。また実際に筆者自身も、フィールドワークの中から、「裏道」の西側を「奥」と表現する言葉に出会って

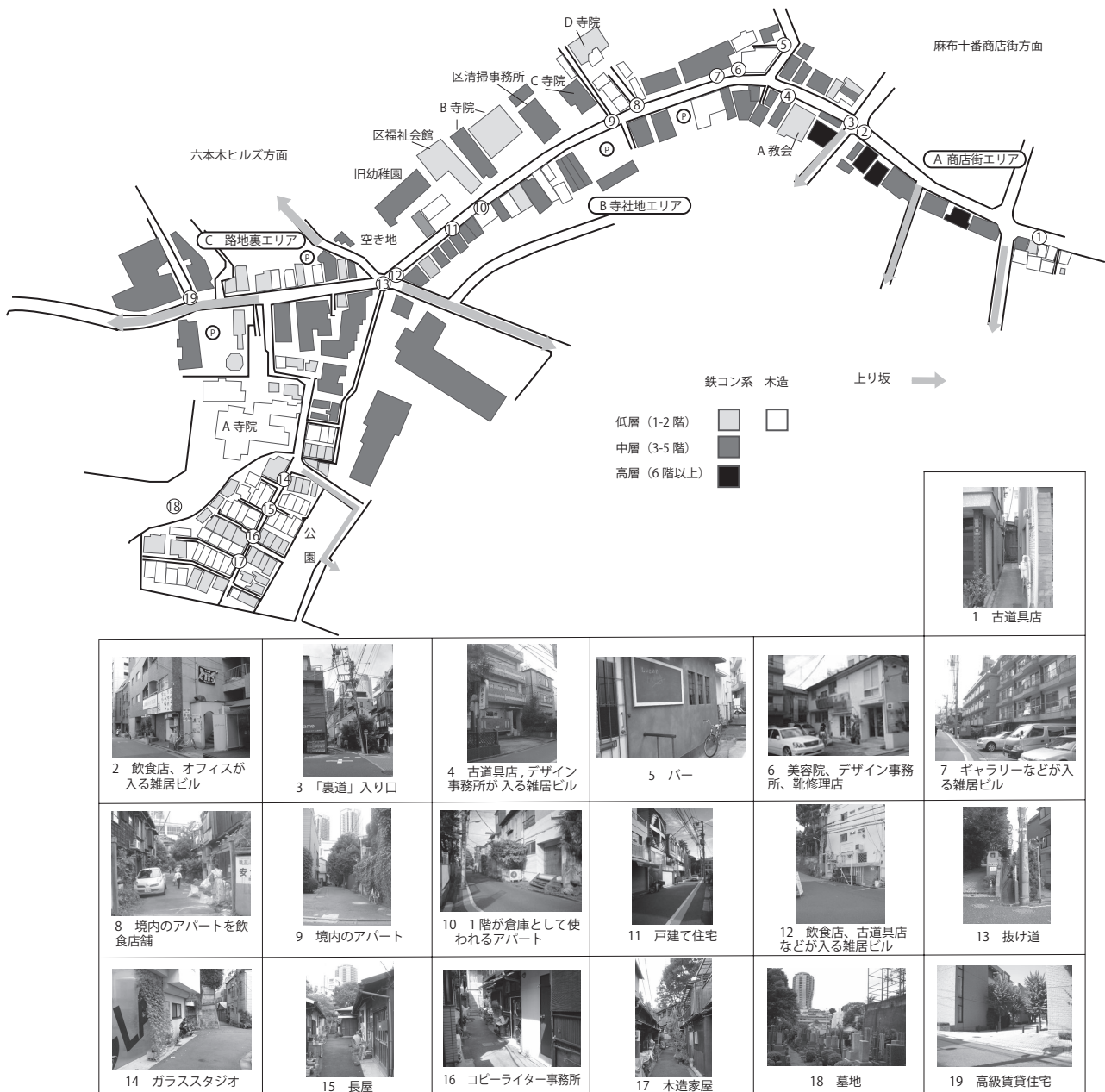


図3 「裏道」ストリート図

出典：『ゼンリン住宅地図』と筆者のフィールドワークから作成。建物構造と高さは筆者の目視による。写真は筆者撮影。

いる<sup>11)</sup>。

以上のように、「裏道」の物質的特徴を確認することからは、通りと建物の近さから生じる物理的緊密性、そして路地裏の構造から生じる隠された閉鎖的雰囲気という2つの特徴が抽出される。

### 3.3 「裏道」に集まる小規模店舗・事務所

既に確認したとおり、この「裏道」には、寺社や教会などの宗教施設に加え、アパートやマンションや戸建住宅が並んでおり、また都市計画の用途地域を確認しても、〈商店街エリア〉を除いては、第1種住居地域およ

び、第1種中高層住居地域とされていることから、この場所は主に居住地としての用途が与えられている。しかし、特に2000年以降において、この「裏道」に残されている古いアパートやマンションの一室が、居住の場所としてだけではなく、多様な経済活動がなされる場所として活用されるようになってきている。ここで、こうした近年増えてきている、通り沿いにある事務所や店舗、施設などを、目視による確認からまとめてみる（表2参照）。

距離にして約400mの「裏道」を中心に、82の飲食や物販、専門技術サービスの店舗事務所が位置している。

表2 「裏道」沿いの店舗・事務所一覧(2010年9月22日実施調査において目視にて確認)

A 商店街エリア		B 寺社地エリア		C 路地裏エリア	
飲食	6	事務所	11	デザイン系事務所	3
事務所	5	飲食	7	事務所	2
貸しオフィス	1	デザイン系事務所	5	ガラススタジオ	1
レンタルスペース	1	不動産	3	飲食	1
倉庫	1	古道具店	2	美容・マッサージ	2
古道具店	1	美容・マッサージ	3	ゲストハウス	2
美容院	1	バー	2	石材店	1
		美容院	2	クリーニング	1
		倉庫	2	理髪店	1
		木工所	2	酒屋	1
		コンビニ	1	工場	1
		バレエ教室	1		
		運送	1		
		ジュエリー制作	1		
		アートギャラリー※	2		
		ゲームショップ	1		
		洋服店	1		
		ゲストハウス	1		
		クリニック	1		
		靴修理	1		
小計	16		50		16
合計					82

※この内1軒は、2010年9月22日日本橋に移転。

特徴としては、飲食店や事務所利用が多いということ、またデザイン系事務所や、古道具店、美容・マッサージや美容院、ジュエリー制作、クリニック、靴修理店など、高度に専門分化した技術・サービス系の事務所・店舗が点在している点である。後に触れることになるが、こうした事務所や店舗は表通りのそれら比べ、人員的にも資本的にも小規模であるという特徴をもつ。また数は少ないが、例えばゲストハウスの存在は、この「裏道」が国境を超えて移動する人々にとって中継地点になっていることを示唆しているし、また木工所、石材店、工場や倉庫などの存在は、製造業が盛んであった頃の当該地域の姿、地域の時間を今に伝えている。

#### 4. 「裏道」に付与されるいくつかの意味 ——可能性／不安定さを生きる人々の活動実践

##### 4.1 「裏道」に集う人々の主体像

筆者は2007年から断続的にだが、この裏道沿いに店舗や事務所を構える店主、事業主の方々、また町会や商店街関係者など地域の方々にお話をお伺いしてきた。本章では、そこから「裏道」沿いに店舗・事務所、または住まいを構える人々20名へのインタビューから、彼らの活

動実践と場所への意味付与の過程を検討していきたい。

ここではまずインタビュー対象者一覧(表3参照)を概観することから、調査対象者の特徴を把握する。第1に彼らの職業に注目する。そこからは、特に2000年以降に、大きな資本力をもたないが、既存の産業構造のニッチを開拓する人々によって、この「裏道」が選ばれている様子が見えてくる。ニッチを開拓する人々とは、具体的に、デザイナーやコピーライター(【A】【N】)、作家や写真家(【D1】【K】【G】【S】)といった独立・起業に際して、特にまとまった資金を必要としない職業を選んだ人々である。さらに古道具店経営(【A】【B】【C】【G】)も、商品の仕入れや処分などのルート(対一般、同業者など豊富)さえ確立できれば参入障壁はそれほど高くないと言える。実際にこの「裏道」にある古道具店は、日本各地、ヨーロッパやアジア各国を自らの足で周り、それぞれ独自の審美眼によって商品となるものを仕入れており、国内の古道具市場に依存しているわけではない<sup>12)</sup>。また古道具店という性格からか、彼らは表通りのアイキャッチのよい場所ではなく、裏通りの隠された場所にあるような、築年数は古いが比較的安価で趣のある物件を求める志向性を有する。物件内装のリノベ



ションも、多くは彼ら本人で行っている。

また靴修理店の【E】は、靴の製造・販売では既存のマーケットへの参入障壁は高いが、修理専門店ならばそのリスクは最小限に抑えられるという考えから、友人と共に起業に踏み切った。また彼は、物件の改装に際しても、修理機械を置く床下にコンクリートを流し込む作業から床や壁の張替えまで、業者に依頼せず、友人ネットワークを頼りに本人たちだけでリノベーションを行い、開業資金を最小限に抑える工夫を行った。

一方で独立・開業に際し比較的まとまった資金が必要な飲食店に関しても、一部同じ特徴が見られる。【H】や【O】のように、ある程度資金的に余裕のある場合もあるが、それ以外で例えば、【P】は独立前からの常連客の紹介で融資の話を得て、また【Q】は移転前の蓄えと両親からの支援で開業資金を用意した。彼らはいずれも表通りから奥まったロケーション、「裏道」に残されている古い物件を付加価値として活用し、独自の世界感をもった店作りを行っている。

以上のように、隙間空間としてのこの「裏道」には、特に2000年以降、大きな資本の裏支えはないが、産業構造の「隙間」を開拓しようとする人々が集まってきている。しかしこのことを彼らが大きな資本をもたないために、人通りが悪く賃料が安い周辺領域に追い込まれていると見るなら、それは不十分である。そういう側面がないわけではないが、彼らにとってこの「裏道」はそうした消極的理由から選ばれているのではない。例えば、「元麻布という大使館などの商売とは関係のない環境があること、坂が多く緑も多い点も気に入っていました。〈中略〉ちょっと裏に入れば古い建物が多く残っている麻布界隈の、一風かわった一画に好ましい場所があればと考えていました。」という【A】の言葉や、「路面で一本道でこの奥まったシチュエーション、可能なら自分がこの場所でやりたいなと（以前から）思っていました。〈中略〉商売という観念からすると、経営者失格の考えかもしれないですけど、ただ自分が今までやってきたことを表現するのに一番この場所というのは適していました。」という【P】の言葉には、この裏道がより積極的な理由から選ばれていることが理解される。

もう一点は、彼らの事業規模（人数）と家族形態である。具体的には、彼らは概ね本人のみか2人で事業を行っている。【E】の靴修理店、【L】の木工所、【M】の不動産会社は、5人と他に比べれば多い方だが、それでも一般的にみれば小規模であると言える。また彼らの家族形態を見ると、多くが独身かDINKS層である。この

点から「裏道」という場所を生きる彼らの構えのようなものが見えてくる。というのも、既述の通り、彼らの事業は隙間産業的性格をもっており、それは大きな資本力をもたない個人でも参入可能な領域であったが、それは同時に事業の不安定さに開かれている。例えば年商規模に関して、模型製作事務所を営む【S】の「去年は1千万ちょっとだったかな。〈筆者：例年それぐらいの規模なんですか〉いやいや浮き沈みは激しいですよ。2、3千万万行くとときもあれば、800万ぐらいの年もあるし。」という言葉は、それを端的に示している。さらに彼らが活動の拠点として選んだ「裏道」も、周囲の家賃相場に比べ安価であり、表通りとは異なる雰囲気があることにより、彼らのような個人事業主をひきつけていたのだが、しかしそうした「裏道」も変化の激しい都心の投資や開発のホットスポットに隣接しており、「場所」そのものの不安定さを拭い切ることはできない。実際に、〈寺社地エリア〉の南側半分には、バブル時に土地を細分化して建てられた細長の戸建て物件が並び、ミニバブル時に持ち上がった共同開発の話が流れた土地の一部は駐車場になっている。また〈路地裏エリア〉には大手ディベロッパーの高級賃貸マンションや社宅が建設されるに至っている。また先に積極的な理由から裏道を選び取った【A】の言葉に触れたが、彼は同時に、「いつまでいるかわからない、ほんとに一時ここにいるっていう感じですから」、「このビルも古いですし、開発で締め出されちゃうかもしれないですしね。」と語っている。また実際にインタビュー対象者のなかでも、【E】【F】【G】【K】のように既に「裏道」から移転しているケースも確認できる。確かに【I】【J】【L】のように「裏道」で家を持ち、世代を重ねている人々もいるが、そうした激しい変化の波に対して彼らだけが特権的な安定の場所を得ているわけではない。

以上のことから、ここで確認した事業規模（人員）や家族形態のミニマムな形は、こうした彼ら自身が抱える不安定さと場所が内包する不安定さという2重の不安定さの上で生を営む彼らの「構え」として見ることができるだろう。

次に、こうした不安定性への構えをもつ人々による活動実践を、2000年代の「裏道」に付与されたいくつかの意味に注目して捉えていく。

#### 4.2 「骨董インディーズ通り」——消費空間への編入と「裏道」のコミュニケーション

現在も「裏道」には3店の古道具店があるが、2003年

表3 インタビュー対象者一覧

略称	性別	出生年	年齢	出生地	住まい	前住地	前職地	職業
A	男	1960年代	40代	埼玉	白金高輪	西荻窪	西荻窪	デザイン事務所兼古道具店経営、音楽家
B	男	1940年代	60代	三重	千駄ヶ谷	D.K	N.A	古道具店経営
C	男	1960年代	40代	D.K	八王子	D.K	八王子	古道具店経営
D1	男	1950年代	50代	東京	元麻布	恵比寿	上野原、代官山	ガラス造形作家、ガラス教室経営
D2	女	1960年代	40代	D.K	元麻布	恵比寿	代官山	ガラス販売店代表
E	男	1970年代	30代	大阪	元麻布	代々木八幡	N.A	靴修理専門店経営
F	男	1960年代	40代	福岡	中目黒	中目黒	中目黒	アートギャラリー共同経営
G	男	1960年代	40代	長野	白金高輪	代官山	代官山	古道具店経営
H	男	1950年代	50代	東京	元麻布	N.A	N.A	画家、古美術店経営
I	男	1920年代	80代	東京	元麻布	三田	三田	無職
J	男	1930年代	70代	東京	元麻布	N.A	N.A	不動産業経営
K	男	1960年代	40代	大阪	元麻布	梶が谷	南麻布	写真家、プリント・製本会社経営
L	男	1950年代	50代	東京	元麻布	N.A	N.A	椅子木地製造業経営（3代目）
M	男	1960年代	40代	福井	日吉	D.K	N.A	不動産会社経営
N	男	1970年代	30代	東京	元麻布	八王子	N.A	コピーライター事務所経営
O	女	1960年代	40代	東京	白金	元麻布	N.A	ダイニング経営、店舗プロデュース
P	男	1970年代	30代	静岡	高輪	D.K	N.A	バー経営
Q	男	1960年代	40代	東京	池袋	麻布十番	麻布十番	ダイニングバー経営
R	男	1950年代	50代	東京	元麻布	N.A	N.A	木工所経営（3代目）
S	男	1960年代	40代	東京	勝どき	東麻布	田町	模型製作事務所経営

の最盛期には、資料や聞き取りから確認できただけでも、8店の古道具店が集まっていた。古道具店の集積地として知られる西荻窪や南青山と比べると見劣りするものの、この細い「裏道」に古道具店が8店集まっていた状況は注目に値する。古道具店の集積過程において「裏道」には何らかの意味が付与されたのだろうか。雑誌や古道具関連の書籍は、当時の状況の一端を次のように記している。

ここ1～2年、東京・麻布十番商店街の脇に入ったところから、元麻布に抜ける狸坂まで、小さいが個性的な店主が切り盛りする骨董店が増えている。歩いて15分圏内のその界隈の通称は十番骨董ストリート。〈中略〉裏道のちょっと迷いそうなところだが、また楽しい（大平・小畑 2003：122）。

（【A】の古道具店は）2000年9月、それまで6年間居を構えた西荻窪から、現在の元麻布の路地に店を移した。住宅街の中を延びる道の、独特な雰囲気惹きつけられたという。同じ年、近くに【Y】もオープンし、地元では古株の【Z】に加えて若手経営者の個性派が揃い、骨董屋5軒となった通りは「骨董インディーズ通り」などと呼ばれ、

注目を浴びている。〔個人名をふせるため一部筆者が修正を加えた。〕（TBS プリタニカ編 2003：54）。

10年ほど前になる。行きつけの和食の店に一人の女の子が勤めだした。それが【X】であった。その店のすぐ近くに、骨董界のニューウェーブの代表と目される【A】が西荻窪から越してきた。〈中略〉その後、間もなく【Y】の店もオープンし、麻布十番が新しいタイプの古道具屋のメッカのようになりはじめた。それらに刺激を受けたのだろうか、突然、【X】は和食の店をやめて古いマンションの一室を【A】のデザインで改装し、古道具とお菓子のお店をオープンする。今から5年ほど前のことである。〈中略〉また六本木ヒルズのオープンによって、【A】や【X】【Y】の店周辺が、裏十番とか新感覚派の古道具店とか呼ばれ、雑誌で取り上げられると、さらに一見のお客が入れ替わり立ち代り、店を訪れるようになった。〔個人名をふせるため一部筆者が修正を加えた。〕（山口 2007：74－5）。

2003年当時一部のメディアを中心にこの「裏道」は、「十番骨董ストリート」や「骨董インディーズ通り」、「裏十番」などと呼ばれ注目を浴びることになった。こ

人数	家族 (括弧内別居)	裏道にきた年	家賃	備考	調査実施日
1人	妻、娘	2000年	10万半		20070803
1人	妻 (息子、娘)	2005年	10万半	元デザイン会社経営	20070804
2人	妻	2002年	10万未		20070804
1人、4人	妻	2001年	D.K		20080821、20100830
1人	夫	2001年	D.K		20081004
5人	独身	2007年	D.K	2009年退社	20080821、20081014
2人	独身	2008年	10万半	2010年9月日本橋に移転	20080829
1人	独身	2003年	20万半	2008年8月南青山に移転	20080821、20081004
1人	妻	2007年	D.K	同ビル内のカフェを共同経営	20080824
1人	妻 (息子2人、孫、ひ孫)	1951年	5万未	元木工所経営	20080826、20100831
D.K	妻、長男、長女、(次男)	1901年	0 (持家)	元ラムネ製造業3代目	20090707、20100830
2人	妻	2003年	D.K	2009年に軽井沢へ移転	20090724、2010802
5人	妻、娘2人	1945年	0 (持家)	祖父が芝で開業	20090724
5人	妻 (子どもの有無不明)	2002年	D.K		20100902
2人	独身	2003年	10万未	2007年に起業	20100907
3人	独身	2008年	D.K	実家が不動産業	20100907
1人	独身	2006年	20万半		20100907
1人	独身	2008年	20万前		20100907
1人	独身	1945年	0 (持家)	祖父が浜松町で開業	20100907
1人	妻	1994年	10万半		20100918

ここからは、2000年に入り古道具店の小さな集積をきっかけに「裏道」が、記号的差異を求めて止まない消費空間の言葉で語られ意味を付与されるようになった様子を読み取ることができる。そこでは古道具店が集まる「裏道」が、商店街空間に記号的多様性をもたらす場所として、また2003年以降は、最先端や現代アートという記号で満たされた六本木ヒルズという空間に意味的な差異を提供する場所として位置づけられるようになっていった。

このように新たな消費空間として発見された「裏道」だが、当事者である古道具店店主達はそこをどのように生きていたのか。彼らの活動実践を捉えることから、新たな消費空間の背後にある、もうひとつの「裏道」像が見えてくる。

上の引用で「裏道」の古道具店集積の中心的な人物とされている【A】は、先にみたように、「裏道」を一般的な経済合理的な観点のみから選び取ったわけではなかった。デザイナーでもある【A】は、自分の仕事に対するよりダイレクトで強い反応を求めて都心の立地を求めつつ、デザイナーとしての自分の価値観に合うこの「裏道」を拠点として選んだ。そこで彼は、週の約半分

は扉を締切りデザイナーとしての仕事に打ち込み、残りの半分は事務所を古道具店として開放するというスタイルをとっている。またそこでは古道具の販売だけではなく、現代作家の展示会や音楽会なども不定期で開かれている。しかし【A】の古道具店は、半分は事務所としての機能を持たされているためか、看板も小さく、入り口から店内を見渡すこともできないため気軽に立ち寄れるような雰囲気ではない。「裏道」の立地というだけで表通りからは隠されているのだが、【A】の店はその「裏道」のさらに「奥」に隠されている。つまりそこは非常に閉鎖性を帯びた空間になっている。しかしそうした閉鎖性を帯びた空間だからこそ、古道具を中心とした下位文化を媒介とした濃密なコミュニケーションが生まれ、店主と客との間に親密性が生まれるのであり、【A】はまさにそうしたコミュニケーションへの志向性から、「裏道」という場所での事務所件店舗という形態を維持しているように思われる。

先にみた「骨董インディーズ通り」や「十番骨董ストリート」の誕生という現象の源泉には、彼らのこうした濃密なコミュニケーションや親密性が存在している。というのも上に引用した証言にもあるように、「裏道」に

おける古道具店の集積の一端を【A】の店舗を中心にした濃密なコミュニケーションが担っていたという事実があるからである。「一時、今から3、4年ぐらい前はこの裏通りに店がいくつかありました。〈中略〉どうしてそんな店があったか」と、僕が杉並にいた頃から通っていた若い連中が、古いものを扱う店をこの辺りで僕もやりたい、私もやりたいと。そういう連中が一時この辺りに並んでいたわけです。」と【A】自身は語っている。また先に引用した通り、【X】は当時、「裏道」入り口の飲食店で働いていたのだが、「裏道」に移転してきた【A】の店舗に通うようになると、そこで器や料理、古道具に関するコミュニケーションを多く交わすようになり、最終的には「裏道」に自身の古道具店兼カフェを開くに至った。一方【Y】は、【A】が西荻窪に店を構えていた当時の常連客で、独立・起業に際して懇意にしていた【A】を頼りに【A】の近くで店を開くことにしたという。こうした彼らに対し【A】も、【X】店舗の内装デザインを手がけたり、三者の店の共同のショップカードを作成したりと、彼らの開業を支援した。現在既に、【X】は立退きによって早稲田へ、また【Y】はより広い物件を求めて恵比寿へ移転したが、この事例が示すのは、「骨董インディーズ通り」や「十番骨董ストリート」という消費空間的な語りとはまた別水準において、緊密性と閉鎖性という「裏道」の構造的特徴を活かした濃密なコミュニケーションが蓄積されていたということである。

#### 4.3 麻布モンパルナス計画——消費空間への接近の試み

先にみた【X】や【Y】に続きいくつかの古道具店が「裏道」を後にすると、自然と「十番骨董ストリート」や十番骨董インディーズ通り」という消費空間的な語り口も影を潜めていった。しかし2006年に再度、この「裏道」に新たな意味を付与するような動きが出てくる。2006年当時、「裏道」に古道具店を構える【G】とガラス工房とガラス教室を構える【D1】【D2】夫妻によって「麻布モンパルナス計画」という裏道とその周辺地域対象にした地域振興プログラムが提起された。

【D2】が麻布十番商店街振興組合に提出した資料<sup>13)</sup>によると、麻布モンパルナス計画とは、「アーティスト、クリエイターが住み、ギャラリーや古美術、古道具店などが多い麻布界隈を中心に、アートとカルチャーを軸にした麻布十番商店街活性化のためのプロジェクト」とされ、その具体的内容として「①麻布の町を中心に、麻布十番駅、六本木駅、広尾駅を結ぶ三角地帯をアート&カ

ルチャーのゴールデントライアングルにみたと、散策マップの作成。②加盟店やアーティスト、クリエイターのネットワークづくり。(ウェブのポータルサイト)③各町ぐるみの連携キャンペーンの企画など。」が提案された。同資料は、麻布十番商店街振興組合の協力を仰ぐためのプレゼン資料として作成されたため、商店街の活性化案という体裁になっているが、その内実は、「裏道」により多くの人の流れを呼びよせることに主眼がおかれたプランであった。そのためのパートナーとして、地域の代表である麻布十番商店街振興組合、スポンサーとして森美術館をもつ六本木ヒルズや、当時竣工直前であったサントリー美術館を有する東京ミッドタウンが選ばれたため、こうした「裏道」を超えた領域の地域振興案が提示された。

結果から言うと、同プロジェクトは未発のままに終わった。その要因は麻布十番商店街振興組合の協力が得られなかったこと、また実際に同プロジェクトを動かしていた【G】と【D2】の意思疎通が上手くいかなかったこと、また決定的だったのは、彼らの計画難航中に、森美術館・サントリー美術館・国立新美術館が連携した「六本木アート・トラインアングル」<sup>14)</sup>という企画がスタートしてしまったことであった。

ここで注目するのは、同プロジェクトが未発に終わったことよりも、そうした「裏道」を超えた地域振興的なプロジェクトが発案されたその背景である。というのも先の古道具店集積のケースは、「裏道」の濃密なコミュニケーションの表出が、意図しない形で消費空間の言葉として語られるという現象であった。そしてそこには、「裏道」と消費空間の間にある一種の摩擦のようなものを読み取ることができた。【A】はメディアの言説によって「裏道」が消費空間に開かれることには消極的態度を示していた。実際に彼は、古道具店が集積し多くの人が「裏道」に流れてくるようになることで、濃密なコミュニケーションを行うために築いてきた自身の「城」が多くの人に晒されることを好ましく思わず、一時は他地域への移転まで考えたという。それは合理性に回収されない濃密なコミュニケーションの舞台である「裏道」空間と、貨幣を媒介とした合理的なコミュニケーションの舞台である「消費空間」の性質の本質的な違いによるものであった。にもかかわらず、麻布モンパルナス計画では濃密な「裏道」の人々が積極的に消費空間にアプローチしていた。その要因は、同計画を発案した【G】や【D1】【D2】夫妻が、単に消費空間的な合理的コミュニケーションを志向していたということではない。といの

むしろ彼らもまた「裏道」を舞台とした濃密なコミュニケーションを志向し実践していたからである。

同計画のきっかけをつくった一人である【G】は、2003年に代官山から「裏道」に移転してきた。当初【G】は「裏道」でそれまでと同様のスタイルの古道具店を営み出したが、次第に商品の売り手／買い手という関係を超えた濃密なコミュニケーションを蓄積するようになり、それにあわせて店舗の性格は多様化していった。特に2005年に古道具店にギャラリーとカフェを併設して以降、フラワーショップが併設されたり不定期ながらフードイベントや音楽イベントなどが期間限定で実施されていった。【G】はギャラリーを始めたきっかけを次のように語っている。

きっかけは作家さんとの出会いですね。自分が作った古道具店に、作家さんが「自分の作った作品を飾ってみたい」って言うてくれたことがあったんですね。それまで本当ギャラリーなんて興味なかったんですよ。〈中略〉女性の作家さんだったんですけど、お茶を飲みながら話していると「私、絵を描いてるんです」という話になりました。当時まだカフェは営業してなくて、僕がお茶を入れてカウンターで話すという感じでした。今となってははっきり思い出せないぐらい本当になんとか始まった感じです。おもしろいもので、ギャラリーとして始めると、ギャラリーを求める人がやってきて、たくさんの作家さん達がいろんな展覧会をやってくれて、おもしろがってくれましたね。

このように【G】の店舗は、そこで取り結ばれる経済的には非合理的だが濃密な対面的コミュニケーションが営まれる場所、様々なアーティストや作家の結節点としての性格をもつようになっていった。

同様に【D1】【D2】夫妻も「裏道」に根ざしたコミュニケーションを志向していた。特に作家である【D1】は、場所に根ざしたコミュニケーションへの志向が強い。【D1】は麻布へ移転してきて間もなく、斜め向かいの長屋に住む【I】と知り合う。【I】は戦前から父親の家業を継ぐかたちで木型職人になり長年その腕をふるってきた。【D1】は彼と親交を深めていく中で、木型職人としての彼の技術に注目し、それをガラス造形に応用することを思いつき、展覧会の開催も含めた共同作業を展開していった。「【I】さんの木工旋盤の技術、木型職人の技術を使って、ガラス工芸で何か出来ないか」ということで一緒に組んでパート・ド・ヴェールガラスの原型を作る作業や、それを木型で作るという作業や、展覧会も一緒にやったりしました。地域の人と一緒に何かやった

という意味では大きかったですね」と【D1】は当時を振り返る。【I】と共に開催した展覧会は、【D1】自宅兼工房の1F工房スペースを開放して行われた。【D1】は「1階の場所を展示スペースとして開放して、それで自分がどんなことをしているのかということを知ってもらってお披露目でもあったかなと、そんな意味合いも少しあったんですよ」と語っている。

また【D1】は先の【G】の古道具店でも、別の展覧会を2005年に行っている。【D1】は次のように当時の展覧会の経緯を語っている。「当時僕らが越してきた時は、あそこはバーだったんです。その後しばらくしたら【G】のお店が移ってきました。当時はただの古道具店だったんですが、少しずつ壁が白く塗られていき、ギャラリーのような空間に変わっていきました。こういう空間で展覧会をやったら面白いと思ったんです。〈中略〉古道具屋さんがもっている古いものと一緒に展示に使ってみるというやり方って結構面白そうだなと思って、ここで展覧会をやらしてくれないかって頼んで実現したんです。」

「裏道」という場所を超えていく性格をもつ麻布モンパルナス計画は、こうした経済的合理性には欠けるが場所に根ざすコミュニケーションから生まれたものだったのだ。当時【G】さんは店舗での様々な出会いを通し、古道具店からギャラリー運営に関心をシフトさせていた。そして自身のギャラリーで展覧会を開く作家たちのためにも、「裏道」により多くの人を呼び込みたいという動機をもつようになり、その方法を模索していた。そうした折、ある雑談の席で【D1】【D2】にその話を持ちかけた結果生まれたのが「麻布モンパルナス計画」であった。ただ同計画は、はじめは場所に根ざしたコミュニケーションであったものが、それを実現させようとする段階で、自らが醸成してきた「裏道」の言葉を消費空間的な言語に変換しようとしたのだと理解できる。彼らの試みは、こうした本質的には相容れない二つのコミュニケーションを、なんとか調停し両立させようとした活動実践だった。

#### 4.4 「裏麻布. com」——「裏道」の「活性化」

最後に、「裏道」で現在進行中のもう1つのコミュニケーション蓄積とそこから付与される「裏道」の意味を取り上げる。2010年1月、「裏道」沿いに立地する飲食店、マッサージ店4店が共同する形で、「裏麻布. com」というWebsiteを立ち上げた。同サイトはこの「裏道」を「裏麻布 st.」(ウラアザブストリート)と読



んでいる。

最近、巷で騒がれている街、西麻布と麻布十番のちょうど真ん中にある高級住宅街元麻布。TV 朝日通りにある消防署の路地を曲がり、下り坂を道なりに麻布十番へ抜ける裏道。昔、此处は商店街が軒を連ねていました。元麻布という地名でわかるように、元々この地域だけが「麻布」だったそうです。その頃の「活気あふれる商店街を取り戻そう」と商店、飲食店、その他が声を掛け合い、この裏道を「裏麻布 st.」(ウラアザブストリート)と呼ぶ活動をしています。朝から夜明けまでずっと遊び、楽しめる場所。「裏」だからこそその猥雑さや、新しい発見があり、人との出会いが、楽しい情報をつくることも。初見の方にはそれなりに。マニアの方にはさらに深い「裏麻布 st.」を耽溺いただけるかと自負しております。もちろんここに集う皆様と私達とで、もっとずっとすっごく「おもしろいコト」やる気まんまんです！「裏麻布. com」(2010年9月26日取得、<http://www.ura-azabu.com/index.html>)

このプロジェクトは、2008年にほぼ時を同じくしてこの「裏道」に飲食店を開いた2人のオーナー【Q】と【O】が仕掛け人である。【Q】と【O】の雑談のなかで、「裏道」にもっと人を呼び込みたい、通りを活性化させたいという話がもちあがった。「裏麻布 st.」というネーミングは、「裏原宿」から引用したものである。プロジェクトの内容としては、通りの店舗をリストアップし、webを中心に広報していき、将来的には加盟店間で連携をして様々なイベントを展開していく予定だという。現在 Web 上では、まだ4店しかリストアップできていないが、既に10店舗近い賛同を得ているという。同プロジェクトは、「裏道」のまさしく「裏」性を付加価値として捉え、それを集客に結びつけるために積極的にアピールしていこうとするものである。

先の二事例と比べても、ここでも共通しているのは、「裏麻布. com」も「裏道」という場所を介したコミュニケーションから発生したものだということである。【O】は以前から【P】や【Q】の店に常連客として通っていたし、【O】と【Q】がほぼ同じ時期に「裏道」に店を構えるようになることで、3者の関係はより深くなっていたことは容易に想像がつく。さらに【Q】は、「裏麻布. com」を運営していくにあたり、町内会にも声かけをしたのだが、その際のパイプ役となったのは、【Q】の店の常連客となっていた町会関係者であった。また【Q】自身も町会関係者の常連客との繋がりから、地元の秋祭りには、神輿の担ぎ手として参加するようになっている。こうしたことから、【Q】や【O】などの

店舗を中心に蓄積されるコミュニケーションが、「裏麻布. com」を発動させる資源となっていることが理解できる。

また一方で、この「裏麻布. com」も、「裏道」における濃密なコミュニケーションと消費空間的な合理的コミュニケーションの間にある困難を抱えている。ここで見た飲食店店主たちも表通りとは異なる「裏道」の雰囲気、そこで蓄積されるコミュニケーションを志向しているのだが、それをいざ自分たちのビジネスと結びつけて語ろうとする際には、「裏道」性は商品の付加価値として語られてしまうのである。彼らの活動実践は、「裏道」という非合理的だが濃密で親密なコミュニケーションへの志向と、「活性化」という経済合理性への志向という相反する志向性をなんとか調定しようとする営みと言えるのかもしれない。

## 5. 濃密なコミュニケーションから立ち上がる空間とそのマインド

ここまで筆者は、「裏道」という場所を、①地理的立地、②物質的特徴、③意味・価値の付与という3項目から検討してきた。第一の地理的立地において確認された点は、本論が対象とする「裏道」が、情報産業集積の進展による事業所の小規模・多様化が進展するエリア、グローバルにフローする資本によって投資の対象と見なされつつも、未だ古い住宅ストックを残すエリアの中に位置付いているということであった。第二の物質的特徴においては、「裏道」が通りの狭さと道と建物の近さから生じる緊密性をもっていること、「裏道」全体が路地裏的な構造をもち閉鎖的な「奥」性を有していることが確認された。そして最後に意味・価値の付与という点においては、まず上記のような特徴をもつ「裏道」に、産業構造のニッチを開拓しようとする人々が集まっていることが確認された。そして次に「裏道」を生きる人々の活動実践を捉えることから、「裏道」にはその構造的・環境的要因を活かした濃密なコミュニケーションが蓄積されていること、そしてその濃密なコミュニケーションが消費空間との逃れがたい関係に向き合っていることが確認された。

最後にこうした「裏道」の状況把握的な記述から提起可能な問題について述べておきたい。それは「裏道」の価値・意義についてである。「裏道」という言葉からは、ノスタルジー的な語り、安定的な歴史性や人々の共同性が保存されている場所という語りが導かれがちだが、本論の議論からは、より積極的な今日的な「裏道」

の意義が導出可能である。それは、「裏道」が既存の産業構造の「隙間」を生きようとする人々にとっての舞台となっているということから求められる。都心にありながらも周辺地域に比べ比較的安価な物件を残している「裏道」という場所は、大きな資本力をもたない彼らにとって必要不可欠な場所である。そして、高度に専門分化し多様化している今日の産業構造を肯定するなら、その一翼を担っている本論が対象としたニッチに挑む人々と彼らの受け皿となっている「裏道」を積極的に評価していくことができる。しかし「裏道」の意義は、地価や家賃が比較的安価であるために、ニッチを生きる人々を引き寄せているという点だけではない。それは「裏道」が単に経済合理性に基づいた「表」の空間の周辺に位置しているわけではないということである。というのも、本論が対象とした「裏道」を生きる人々は経済合理的な観点からだけで「裏道」を選んだわけではなかった。もちろんそういった側面がないわけではなかったが、それ以上に彼らは「裏道」に残されている建物や地理的に形成された裏路地空間の雰囲気、そしてそれらが装置となって語られる「裏道」の歴史など、これらの総体に彼らはひきつけられ「裏道」を選びとっていた。こうしたことから、「裏道」は、都市経済の多様性と同時に、都市の意味空間の多様性の一翼を担う場所となっているのである。

さらにもう1点付け加えておかなければならないのは、隙間を生きる人々が「裏道」を舞台に、経済合理性には収まりきらない濃密なコミュニケーションを蓄積させていたことである。彼らの濃密なコミュニケーションと活動実践が、「裏道」に新たな意味を付与し、今日的な「裏道」の特異な雰囲気を形成しているのである。こうした諸個人の濃密なコミュニケーションから立ち上がってくる「裏道」の特異な空間形成は、今日の都心で展開されている大資本牽引型の大型開発による空間形成とはまた別のあり方を提示しているように思われる。今日の大資本主導型の開発は、「裏道」的な空間的意匠を施すことも、地域の歴史を編集した形で開発空間に提示することも可能にしている。しかしそうした経済合理的な観点から計画され形成される空間においては、経済合理性にとらわれない柔軟で否定形な諸個人の濃密なコミュニケーションまでを生み出すことはできていない。「裏道」の本質的な意義とはここに認められるのかもしれない。こうした都市の隙間空間に生成する諸個人の濃密なコミュニケーションから立ち上がる空間が、大資本や行政主導型の空間形成とどのように関係し合いながら

展開していくのかに注目することが、都市空間研究において今後ますます重要となるだろう。また「計画され形成される」空間においても、単なる意匠としての「裏道」ではなく、諸個人の濃密なコミュニケーションに基づいた「裏道」空間が形成され得るならそれはどのようにしてかということを問うていく必要があるだろう。

最後にもうひとつ、「裏道」が提起する問題について述べておく。それは本論が対象とした「裏道」を生きる人々の「生き方」から提起されるものである。というのも、先述のように「裏道」は決して安定的な場所ではなく、むしろ流動性の高い場所であった。「裏道」は変化の波から守られているわけではなく、むしろそれに晒されている場所であった。一般的に流動性の高い場所では、濃密なコミュニケーションは生まれにくく、個人もその場所に帰属意識をもつことは難しいと考えられる。しかし本論が対象とした「裏道」を生きる人々の中には、常に変化の流れに身を置き移動の可能性を感じながらも、「裏道」という場所で濃密なコミュニケーションを展開させ、一時でもそこに帰属意識を芽生えさせていた。このように変化の不安を受けつつも、そこに帰属意識を植えられることができるということ、つまり流動性の上にありながら自分と場所の関係を紡いでいくことができるということ—M. イグナチエフの言葉を借りるなら「都市的帰属」(Ignatieff [1984] 1994=1999: 193)<sup>15)</sup>—を「裏道」を生きる人々は共有し実践しているのではないだろうか。本論では詳しく論じることはできなかったが、だからこそ筆者の調査のなかでは、「裏道」における新住民／旧住民という二項対立が問題としてもちがってこなかったのではないだろうか。「旧住民」と呼んでおかしくない人々も、2・3世代前は、2000年以降の「裏道」を自身の活動実践の場所として選んだ人々と同様にニッチに挑む人々であったし、今なおそういったマインドは失われていないのではないだろうか。こうした点については、別稿で改めて論じる必要がある。

今日の都市空間の変容過程を捉えていこうとする際に、その構造だけでなく空間の生きられ方に照準する重要性は疑いないが、その際には、諸個人の活動実践と場所の関係を読み解いていくことが一つの重要な視点となっているのである。

## 付記

本論は、2009年日本都市社会学会第27会大会自由報告IV部会（於：県立広島大学）、及び2010年関東都市学会

定例研究会(於:東洋大学)において報告した内容に加筆修正を加えたものである。両報告の議論から多くの示唆を得たことに感謝する。

## 注

- 1) 空間のハードの作られ方に注目が集まってきた東京都心空間の研究アプローチのなかでも、例えば平井太郎のように、超高層ビルを林立させる政治・経済的メカニズムの考察を超え、超高層住宅の居住者への調査からそうした空間の生きられ方、意味付与のあり方の検討を通して、現代社会、今日の都市東京という現象を解説しようとする試みもある(平井 2009)。
- 2) 地理学からの同様の議論として、大城直樹は裏原宿に加え大阪の南船場や立花通、神戸の栄町通りといった隙間空間としての「ストリート」の形成過程をおさえることから、大資本が軒を連ねる「表」通りと同時に小資本による経済実践が営まれる「裏」通りが出現することの背景に、差異を求めて止まない資本主義の今日的な空間志向を読み取ることができることを示唆する(大城 2008)。
- 3) 例えば、日本社会学会編、2010、『社会学評論』60(4)号では、「記憶と場所—近代的时间・空間の変容」と題した特集が組まれている。
- 4) 北田は、吉見が描いたその後の渋谷を広告への注目から論じている。北田によるとポスト80年代の渋谷では、吉見が捉えた渋谷と比べ「脱舞台化」、「脱記号化」が進み、意味の中心としての渋谷のさらに中心地であったパルコ前周辺の優位性の失墜が起こっていること、またそれと並行するように、渋谷に「ランプリング・ストリート」というある裏道が人を呼び寄せるようになったことを指摘している。しかしその裏道にも同様に「脱舞台化」「脱記号化」の流れが進行しており、「表」／「裏」という二項対立的な意味やサブカルチャーの中心地といった、渋谷の特殊性を明示できるような濃密な意味が付与されているわけではないことを指摘している(北田 2002:116-22、166-70)。
- 5) また小野は、そのなかで職業の高度な専門分化が生じ、それが複雑にリンクすることで経済活動が営まれていると論じる。またそうした状況を「クリエイティブ・コンプレックス」と呼び、その構造的特徴を、①多様な職種によるチーム・プレーの原則、②職域の異業界横断的構造、③従業上の地位の業界内重層的構造と論じる(小野 1989:96-100)。
- 6) また同誌の港区町丁別の「住みたい町」ランキングには南麻布4丁目、南麻布5丁目、元麻布2丁目、と麻布3丁目が1位から4位を占めている(鈴木章一編 2009:66-7)。
- 7) 代表的なものとして中沢(2005)を参照。
- 8) 地元町会長S氏(2010年8月30日実施)、路地裏エリア

の居住者S氏(2008年8月28日実施)、A寺院住職N氏へのインタビューより(2010年9月9日実施)。

- 9) 元麻布を中心とした麻布の郷土史家I氏(2010年9月1日実施)、〈寺社地エリア〉居住者のK氏へのインタビューより(いずれも2010年9月18日実施)。
- 10) 道と建築物の関係から街路空間の特徴を捉えるアプローチとして、大野(1980)を参照。
- 11) 地元町会長S氏、「裏道」に模型製作事務所を構えるO氏へのインタビュー(2010年9月25日実施)、O氏を挟んでの通りでの立ち話から「裏道」の人々がA寺院付近を「奥」と形容していることが示唆された。また郷土史家I氏は、この「裏道」全体を麻布の「奥」と表現している。
- 12) こうした国内の同業者ネットワークに依存しない古道具店店主の仕入れ方法としては、例えば、新潮社編(2009)の「特集バリと骨董」が参考になる。
- 13) 「麻布モンパルナス計画—麻布十番アート&カルチャープロジェクト」。【D2】氏へのインタビューの際に本人から頂いた。
- 14) 「森美術館」「サントリー美術館」「国立新美術館」が連携した企画。3館共通の割引制度に加え、3館の情報や周辺のアートギャラリーの情報を掲載したマップを作成、発行している。また2009年からは、六本木商店街振興組合も巻き込んだ「六本木アートナイト」というイベントもスタートしている。こうしたプロジェクトは、パンフレットにある、「六本木アート・トライアングルは、東京の新しいアートの拠点です」という言葉に象徴されるように、当該地域をアートという側面から特徴付け、他地域との差異化を図ろうとするものであると理解できる(森美術館 2010)。
- 15) 「アーバンビロッキング」は本文では「都会的帰属」と訳されているが、ここでは北田の議論から示唆を得て「都市的帰属」という訳語をあてた(北田 2005:191)。

## 文献

- Gieryn, Thomas F, 2000, "A space for Place in Sociology", *Annual Review of Sociology*, 26: 463-96.
- Haevey, David, "From Space to Place and Back Again: Reflections on the Condition of Postmodernity", Jon Bird, Barry Curtis and Tim Putnam ed., *Mapping the Futures: Local Cultures, Global Change*. New York and London: Routledge, 3-29. (=1997, 加藤茂生訳, 「空間から場所へ、そして場所から空間へ—ポストモダン性の条件についての考察」『10+1』INAX 出版11: 85-104.)
- 平井太郎, 2009, 「超高層住宅をめぐる現代社会論」『専修人文論集』85: 1-30.
- 平山洋介, 2006, 『東京の果てに』NTT出版株式会社.
- , 2010, 「東京バブルスケープ」『都市問題』101(1): 50-8.
- Ignatieff, Michael, [1984]1994, *The Needs of Strangers*, Vintage. (=1999, 添谷育志・金田耕一訳『ニーズ・オブ・

- ストレンジャーズ』風行社。)
- 石渡雄介, 2006, 「サブカルチャーによる脱テリトリー空間の生成とその意味付け—宇田川町におけるクラブカルチャーのスポットとネットワーク」『先端都市社会学の地平』1: 171-95。
- 北田暁大, 2002, 『広告都市・東京—その誕生と死』廣済堂。
- , 2005, 「chap.1空間の蒸発—リベラリズムについて(3)」『10+1』INAX出版, 39: 185-93。
- 国土交通省, 2010, 「土地総合情報システム」(2010年11月1日取得, <http://www.land.mlit.go.jp/webland/top.html>)。
- Massey, Doreen, 1993, "Power-Geometry and a Progressive Sense of Place", Jon Bird, Barry Curtis and Tim Putnam ed., *Mapping the Futures: Local Cultures, Global Change*. New York and London: Routledge, 59-69. (= 2002, 加藤政洋訳, 「権力の幾何学と進歩的な場所感覚」『思想』933: 32-44。)
- 三田知実, 2006, 「消費下位文化主導型の地域発展—東京渋谷・青山・原宿の『独立系ストリート・カルチャー』を事例として」『日本都市社会学年報』24: 136-51。
- 森美術館, 2010, 「六本木アート・トライアングル」(2010年11月4日取得, <http://www.mori-art-museum.jp/atro/index.html>)。
- 森記念財団, 2005, 『港区サーベイブック3 港区の産業』。
- 中村由佳, 2006, 「ポスト80年代におけるファッションと都市空間—上演論的アプローチの再検討」『年報社会学論集』19: 189-200。
- , 2007, 「『ストリート化』する都市の消費空間—『裏原(宿)』的なものの消費社会論的検討に向けて」『社会学ジャーナル』32: 95-110。
- 中沢新一, 2005, 『アースダイバー』講談社。
- 小野純一郎, 1989, 「東京のクリエイティブ・ゾーンの形成」北村嘉行・寺阪昭信・富田和暁編『情報化社会の地域構造』大明堂, 94-103。
- 大平一枝・小畑雄嗣, 2003, 『ジャンク・スタイル』株式会社平凡社。
- 大野秀敏, 1980, 「まちの表層」, 楳文彦他『見えがくれする都市』鹿島出版会, 139-95。
- 大城直樹, 2008, 「都心における街路の『若者化』」浅野慎一・西村雄郎・岩崎信彦編『京阪神都市圏の重層的なりたち—ユニバーサル・ナショナル・ローカル』昭和堂, 370-86。
- 新潮社編, 2009, 『芸術新潮』60(4): 18-96。
- 鈴木章一編, 2009, 『新・土地のグランプリ』講談社。
- 田中研之輔, 2004, 「都市空間の管理と路地裏の身体文化—スケートボーダーの『たまり場』をめぐる」『日本都市社会学年報』24: 155-71。
- TBS ブリタニカ編, 2003, 『Pen』98。
- 東京都, 2010, 「平成18年事業所・企業統計調査報告事業所編」(2010年11月1日取得, <http://www.toukei.metro.tokyo.jp/jigyoku/2006/jg06t10000.htm>)。
- 植田剛史, 2009, 「超高層建築物にみる2000年代東京の都市空間再編とその『実行者』—空間形態・空間利用の変化パターンと建築主・設計者・施工者に関する考察」日本都市社会学会第27回大会(於: 県立広島大学)配布資料。
- 上野淳子, 2008, 「規制緩和とともなう都市再開発の動向—東京都区部における社会—空間的分極化」『日本都市社会学年報』26: 101-116。
- , 2010, 「東京都の『世界都市』化戦略と政治改革」『日本都市社会学会年報』28: 201-218。
- 山口信博, 2007, 「松澤紀美子論/小さなお尻の大きな志」澄敬一・松澤紀美子『1×1=2』株式会社ラトルズ, 74-9。
- 吉見俊哉, 1987, 「都市としての盛り場—都市概念に関する若干の考察」『地域社会学年報』4: 83-113。
- , [1987] 2008, 『都市のドラマトゥルギー』河出書房新社。
- 横山順一 YOKOYAMA, Junichi 専修大学大学院文学研究科社会学専攻博士後期課程3年